

『淫穴主将猛の卒業記念エロ動画制作』 サンプル

## 目次

登場人物紹介

CHAPTER1 エロインタビュー精通編・チクニー・飲精  
(サンプル掲載はここまでとなります)

(以下、製品版収録)

CHAPTER2 エロインタビューケツマ〇コ開通編・フェラチオ

CHAPTER3 ロデオマシーンとの疑似アナルセックス

CHAPTER4 熟成雄臭下着スメリング

CHAPTER5 猛ディルドアナニー

CHAPTER6 相互無様哀願アナルセックス

余談 これは三人だけの秘密

## 登場人物

### 高坂猛（こうさか たける）

大学四年生。丈翼大学剣道部主将。

通常時 11.6 センチ、勃起時 23.7 センチのペットボトル早漏チンポの持ち主。

強豪剣道部を保有する有名企業への就職が決まっている。

### 古坂拓斗（こさか たくと）

大学四年生。丈翼大学剣道部所属。

猛のルームメイト。エロ動画撮影ではカメラマンを務める。

### 鳴島泰輔（なるしま たいすけ）

大学四年生。丈翼大学剣道部所属。

猛の親友。エロ動画撮影ではゴーグルマンを務める。

## CHAPTER1 エロインタビュー精通編・チクニー・飲精

猛は寮の自室で、真っ赤なボクサーパンツ一枚の姿で椅子に座っていた。

色白の肌ではあるものの、剣道で鍛え抜かれた筋肉により西洋彫刻のような魅力を放つ裸体は男らしく、同時に、雄特有の野性味を感じさせない清潔感のある肉体であった。

猛の顔もまた、清潔感溢れるイケメンフェイスであり、雄特有の野性味を感じさせないものであった。

そんな猛の裸体の中で、雄を感じさせる要素と言え、真っ赤なボクサーパンツのもっこりだ。

西洋彫刻のような裸体ならば、チンポもまた慎ましやかであるべきだ。

だが、猛の真っ赤なボクサーパンツのもっこりは、堂々と存在を主張しており、むっちりとして盛り上がっている。

顔も身体もイケメンであり、ボクサーパンツのもっこりが堂々と主張するデカチンぶりは、猛が雄として優れていることを示している。

「ほんと、猛ってば見た目だけは男の極みって感じだよな」

猛に撮影用カメラを向ける拓斗がにやにやと笑っている。

カメラを向けられている猛の顔は、ほんのりと赤く染まっており、視線が撮影用カメラから逸れている。

「なんだなんだ、猛ってば、緊張しているのか？」

ちゃんとカメラを見ないと駄目だろ？」

猛の肩に手をかけた泰輔が拓斗の構える撮影用カメラを指差す。

撮影用カメラは、今日のために集めたカンパで購入したもので、見るからに高そうで高性能そう。

カンパを集めたのは、猛のケツマ○コを勃起チンポで舐めてくれた丈翼大学の男子学生やそのOBたちであり、彼らは「高坂猛卒業記念エロ動画制作委員会」なるものを立ち上げたようなのだ。

伝聞調になる理由は、エロ動画の主演であるにもかかわらず、猛は殆ど関与してないからだ。

「高坂猛卒業記念エロ動画制作委員会」が猛に求めたのは、猛にエロ動画の主演になることと、エロ動画制作にあたって、NGとなる要素は何か、という問いかけだった。

猛はエロ動画の主演になることは恥ずかしかったのだが、「高坂猛卒業記念エロ動画制作委員会」の交渉役を担った泰輔に、「猛が卒業した後も猛のケツマ○コを忘れられない俺たちに慈悲をかけてくれ」と土下座までされたので、猛は己の淫乱ケツマ○コを可愛がってもらったお礼だと思って引き受けることにした。

そして、NG要素については痛みを伴う行為と尿道責めと答えた。

以前、町おこしSMショーのモデルになったときに尿道責めを経験したのだが、猛は二度と味わいたくないと感じたのだ。

猛の陰茎は常人に比べて太く長い。

だから、尿道プジーが前立腺に届くまでかなりの長さを掘削されなければならない、尿道に異物が存在することを気持ちよいと感じられない猛にとっては、痛みが九割、快楽が一割と

あまりにも割に合わないプレイだからだ。

とはいえ、わざわざカンパを集めてまで猛のエロ動画を撮影しようとする熱意は凄いと猛は感じている。

「そりゃ、緊張するに決まってるだろ」

猛は息を吐いた。

DK時代から寮生活を送っている猛は、部屋でボクサーパンツ一枚の姿になることぐらいでは緊張しない。

カメラを向けられるのも、イケメンである猛にとってよくあることである。

だが、今日、これからすることは、猛にとって人生で初めてのことなのだ。

その上……

「指示に従えばいいって話だけど、何をさせられるのか分からないのに緊張しないわけないだろ？」

猛は羞恥と不安を抱きながら、撮影用カメラを構える拓斗に告げた。

「事前に撮影内容を伝えたら面白くないだろ？」

猛の驚く顔からしか摂取できない栄養素もあるわけだし。

ていうかさ、毎日あんなにアナルセックスしているのに、エロ動画撮影が恥ずかしいのか？」

「恥ずかしいに決まってるだろ」

拓斗の問いかけに猛は頷いた。

DK時代に勃起チンポとアナルが見える状態でのヌード写真を撮影されたことはあるし、アナルセックスの後の乱れた姿を撮影されたこともある。

だが、エロ動画、つまり、鑑賞する人たちの性欲を刺激する目的での動画の主演になるということは、猛にとって初めてのことだったのだ。

「猛ってば、アナルセックスだとあんなに乱れるのに、欲情していない時は初でシャイだよな。

まあ、お堅い性格の剣道青年がチンポに負けて乱れ狂う落差が、猛の魅力なんだけどな」

泰輔が猛の背中を撫でながら耳元で囁く。

「猛が俺たちの猛でいられる時間は残り少ないわけだし、思い出作りは大切だろ？」

撮影用カメラを向ける拓斗の言葉に、猛は大学卒業まで残り一か月であることを自覚する。

卒業すれば、猛たちは各々の道を歩き出す。

猛は、名門剣道部を有する有名企業への就職が決まっているし、泰輔はスポーツ用品を扱う会社への就職が決まっている。

撮影用カメラを構えている拓斗は、大学院でスポーツ工学の研究をするというし、剣道部の仲間たちの間には卒業を機に結婚をする者もいる。

猛は既に何通かの招待状を受け取っており、そのいずれにも出席で返事を送っている。

結婚……

……チクリと猛の胸が痛んだ。

考えてはいけないこと、意識してはいけない何かを掘り当ててしまった気がする。

猛は慌てて首を振り、強引に思考を切り替える。

「……まあ、思い出作りは大切だよな」

思い出作りという言葉で、猛はDKの卒業記念で当時の寮生たちから贈られた猛ディルドを思い出した。

ケツマ○コ奴隷である猛が、ケツマ○コの疼きを自分で鎮められるようにと贈られた、猛のペットボトル早漏チンポそっくりに作られたディルドだ。

アナルセックスのために自分から男を誘う勇氣を持てなかった猛は、丈翼大学の男子学生たちに己のケツマ○コを開放するまでの間、猛ディルドでケツマ○コを慰めていたのだ。

それを思えば、猛のケツマ○コを使ってくれた丈翼大学の男子学生たちに、エロ動画を残すことは恩返しになるのだろう。

「こんなにカッコいいイケメンが俺たちにケツマ○コを差し出していたことを記録に残さないとな」

「そうだよなあ、猛にチンポを突っ込めたことは俺たちの一生の宝物だ」

拓斗と泰輔が猛に好色の眼差しを向けている。

その眼差しに猛のケツマ○コがキュンと疼く。

今日のエロ動画撮影のために、猛と泰輔は二週間の禁欲を課された。

猛と泰輔のチンポには射精防止リングが嵌められており、オナニーはもちろんのこと、夢精も封じられているのだ。

猛はぐくりと唾を飲み込んだ。

一度、アナルセックスを意識すると、猛の人格は常識と羞恥からケツマ○コの奴隷へと変貌する。

常識と羞恥心で考えるのならば、エロ動画の主演になるというのは恥ずべき行為でしかない。

だが、このエロ動画撮影が終われば、猛のアナルセックスが解禁されるのだと思うと、常識とか羞恥心というのは吹けば飛ぶほどに軽くなる。

「ほら、じゃあカメラを向かないとな。」

猛のスケベな姿を見してくれるカメラの向こうの皆に挨拶しないとな」

泰輔が拓斗の構える撮影用カメラを指差す。

その泰輔の横顔を見て、猛はふと疑問を抱いた。

「なあ、なんでプールでもないのにゴーグルをつけているんだ？」

猛の疑問は、エロ動画についての知識がまったくない状態ならば、当然の疑問であった。

ここは剣道部男子寮の猛たちの部屋だ。

それに、今は卒業式をおよそ一か月後に控えた一月下旬。

場所も、季節も、ゴーグルをつけるのには向いていない。

「なんでって、エロ動画の脇役は、ゴーグルマンって決まってるんだよ」

「そういうものなのか？」

泰輔の説明に、猛は首をかしげる。

DK時代にアナルセックスの快楽に目覚めて以来、性欲の虜となっている猛だが、エロ動画を見た経験はそんなにない。

だから、エロ動画の脇役はゴーグルマンと言われても、ピンとこない。

「まあ、そういうもんだってことで」

お調子者の泰輔の言葉だけならば、冗談か嘘の可能性もあるが、拓斗までこう主張するのならば、そういうものなのだろう。

「ああ、分かった」

だから、猛は頷いた。

「それじゃあ、エロ動画撮影を始めるぞ。

まずは、カメラに向かって挨拶してくれ」

拓斗の指示通りに、猛は撮影用カメラに向かって挨拶をする。

「高坂猛。

丈翼大学四年生、剣道部主将です。

これから、俺の卒業を記念したエロ動画の撮影をしてもらいます。

よろしくお願いします」

「じゃあ、最初はインタビューから行こうか。

精通したのはいつ頃で、どんな風だったんだ？」

隣に座った泰輔の問いかけに、猛は羞恥に顔を赤らめた。

泰輔や拓斗、いや、丈翼大学の男子学生たちを相手に、猛はアナルセックスの日々を送っている。

チンポをケツで抱きしめ、ケツマ○コを使われることが大好きな猛にとって、アナルセックスは大学生活の一部なのだ。

だが、性欲に満ちた大学生活を送っているとはいえ、猛は羞恥心を失うことはない。

アナルセックスの前では優先順位が下がるだけで、羞恥心を失ったことがない猛にとって、己の性の変遷について語るとするのは恥ずかしいことなのだ。

とはいえ、エロ動画の主演となることを受け入れたのは猛自身だ。

だから、質問に答えないというのは、男らしくない行為だろう。

「■C二年頃だったかな。

周りの男子たちより一年ぐらい遅かったんだ。

夢精したんだ」

猛は当時のことを思い出すと、いたたまれない気持ちになる。

あの頃の猛は、己が女性とセックスをすることができると信じていたし、ケツマ○コの奴隷になるなんて、考えてもいなかった。

ごくごく普通に一般的な■Cだったと言えるだろう。

「へえー、で、淫夢の内容は覚えているのか？」

ケツマ○コに体育教師のデカマラを突っ込んでもらう夢とか？」

「そんなわけないだろ」

泰輔の問いかけに、猛は首を振った。

「あの頃の俺は、ケツマ○コなんて言葉は知らなかったし、ケツマ○コが疼くこともなかったんだ」

「嘘だろ？」

泰輔が疑わし気な顔をして、猛に問いかける。

猛に撮影用カメラを向けている拓斗も、疑わしげな顔をしている。

「あのなあ、俺がケツマ○コに目覚めたのはDKの時だ。

それまでは、チンポしか弄ってない」

「……信じらんねえ。

毎日アナルセックスしている猛に、そんな初な時代があったなんて」

泰輔が大袈裟に首を振るのを見て、猛はむっとした。

確かに、猛の大学性活はアナルセックスの日々であった。

猛がケツマ○コの奴隷であることを寮の仲間たちに告白してからは、アナルセックスをしない日は殆どなかった。

ケツマ○コにチンポを突っ込まれ、男たちの性欲のはけ口にされていると、猛はどうしようもなく昂り、毎回毎回処女喪失をしたかのように新鮮かつ鮮烈な絶頂を迎える。

そういう意味では、猛は天性のケツマ○コ奴隷であり、アナルセックスの体現者であると言える。

だから、大学時代の猛しか知らない泰輔や拓斗がケツを弄らない猛を想像しにくいのは、理屈では理解できる。

だが、ケツマ○コ奴隷であるとはいえ、猛は己を男だと思っている。

ケツマ○コでチンポを抱きしめ、奉仕することが快楽となっている猛ではあるが、猛のすべてがケツマ○コ奴隷ではないのだ。

男としての部分も確かにあり、その猛の男の部分が、天性のケツマ○コ奴隷だと思われることにむっとするのだ。

「オーケーオーケー、猛にも初で無垢な時代があったんだな」

猛の機嫌の悪さを察したのか、泰輔が両手を挙げて首を振った。

「んじゃ、質問の続きな。

精通したとき、どんな淫夢を見たんだ？」

泰輔の質問に、猛はいたたまれなくなった。

当時の猛としては、当然の願望だったのだが、己の本性を知り尽くしている今の猛にとっては、叶うはずのない妄想を告白することに等しかったからだ。

猛にもプライドがあるし、エロ動画という形で猛の淫夢が残るのは、恥ずかしい。

だが、答えるしかないだろう。

猛はエロ動画の主演となることを了承したのだから。

「当時の教育実習生が、美人で気さくな女性だったんだ。

……その人とのいやらしい夢を見て、夢精したんだ」

猛の告白に、泰輔が空を泳ぐティラノサウルスを見たかのような顔をする。

撮影に専念している拓斗は、地面から蛸が生えてきたかのような顔をする。

「……猛って、女の子に性的な興味、あったの？」

泰輔の問かけは、猛のケツマ○コを何度も何度もチンポで蹂躪してきた男の質問としては至極もったもな内容であった。

猛は、泰輔のように合コンに参加したりしないし、女性に告白をされても断っている。

泰輔も、拓斗も、いや、猛のケツマ○コを使ってきた丈翼大学の男子学生たちが、猛は女性に関心がないと考えても仕方がないと言えよう。



「当たり前だろ、俺だって、男、なんだぞ」

泰輔の問いかけに猛は再びむっとした。

猛は恋愛の対象としての男が好きなわけではない。

ケツマ○コを蹂躪するチンポが好きなのだ。

猛が泰輔たち、男とアナルセックスをするのは、いわば、チンポがメインで男であることがおまけというわけだ。

「……いやまあ、確かに、猛も、男、だよなあ。

こんなに立派なチンポをぶら下げているわけだし」

泰輔が猛の真っ赤なボクサーパンツのもっこりに視線を向ける。

拓斗も撮影用カメラを猛の真っ赤なボクサーパンツのもっこりに向ける。

猛のもっこりは、常人のもっこりよりぽこっと飛び出ており、その中身が人並み外れたデカチンであることを示している。

そう、チンポの大きさと言う意味では、猛は立派な男なのだ。

「でもさ」

泰輔が引きつった笑みを浮かべて首を傾げた。

「猛はさ、チンポで相手をイカせることもできない早漏じゃん。

それなのに、女の子とセックスできるって思ってるの？」

痛いところを突かれて、猛は顔をしかめた。

猛のチンポは、見かけだけなら問答無用のデカチンなのだが、その立派な見かけに反して極度の早漏なのだ。

猛は過去に、チンポを使う側としてアナルセックスに挑んだことがある。

だが、猛は相手のケツマ○コで何度も何度も絶頂し、ザーメンをぶっ放すだけで、相手をイカせることができなかったのだ。

その時は結局、猛のケツマ○コにもチンポをぶち込んでもらって、三連ケツの真ん中になる形で相手をイカせたのだが、これをもって、セックスの役に立つチンポと主張するのは無理があるだろう。

猛は顔を真っ赤にして、後頭部を掻きむしった。

それから肩を落とし、大きく溜息をついた。

「……■C時代は、自分が早漏だなんて思いもしなかったんだよ」

猛にとっては、男として最大の恥辱の告白であり、人生最大の屈辱なのだが、泰輔が驚きと呆れが混ざったような顔で問いを重ねてくる。

「あんなに酷い早漏なのにか？」

ぶっちゃけ、早漏世界選手権で優勝できるぐらいの早漏じゃん、猛は。

なんで、早漏だなんて思わなかったんだ？

早漏って言葉自体、知らなかったのか？」

泰輔の問いかけは、猛の男のプライドにとって最大の急所への容赦のない口撃であった。

試合では闘争心に溢れるものの、普段の生活では常識的で理知的である猛にとっても、かなり腹が立つ質問だ。

エロ動画撮影だという自覚がなかったら、肩を小突くぐらいのことはしただろう。

とはいえ、これは、エロ動画撮影なのだ。

猛が羞恥に震えながら、恥ずかしい秘密を告白することも要素の一つなのだ。

……とはいえ、腹が立つのは事実なので泰輔には、あとで何か仕返しをしようと、猛は考えた。

「■Cとはいえ、早漏ぐらい知っているさ。

ただ、■C時代の俺は、チンポの見せ合いとか、合同オナニーとか、そういうことをしたことがないから、早漏だって自覚がなかったんだよ」

「そっかー。

今の猛からは想像がつかないけど、■C時代は男友達と性的な交流はしてなかったんだな。

いやはや、本当に想像できないけど」

わざわざ、「想像できない」と繰り返す泰輔に、猛は心の中で泰輔への評価を下げる。

「じゃあ、■C時代の猛は、早漏の自覚がなくて、世界一位の早漏でも女の子とセックスができるって信じていたんだな？」

「……その通りだが、わざわざ繰り返すなよ」

猛は心の中で泰輔への評価を一段下げた。

泰輔とのセックスはかなり気持ちがいいのだが、普段の言動で損をしていると、猛は泰輔について評価をしている。

「その教育実習生、どんな人だったんだ？」

泰輔の質問に、猛は「そんなことまで聞くのか」と思った。

猛にしてみれば、教育実習生の淫夢は、男としての猛にとって大事な記憶である。

己が男であることに疑問を抱かなかった頃の憧れの対象であり、精通の切っ掛けでもあるのだから、当然と言えよう。

だから、猛がケツマ○コ奴隷であることを知っている泰輔たちには話したくないのだが、エロ動画の主演が黙秘をするというのはよくないことだろう、と猛は考え直す。

「ボブカットで、ハードル選手だからかな、スタイルが綺麗で、うん、ハードル走の手本を見せている時の脚が、すごく綺麗だった」

照れくささを感じながら、猛は当時の大事な思い出を告白すると、泰輔がにやける。

「猛は脚フェチなのか。

綺麗な脚でペットボトル早漏チンポを踏んでほしいとか思ってたのか？」

「そんなわけないだろ！」

泰輔のいやらしい質問に猛は声を荒げた。

あの教育実習生だった女性は、猛の男性性にとって、千里塚に等しい大事な存在だ。

性欲の対象ではあったが、同時に憧れの対象でもあり、記憶の中で美化されたマドンナでもある。

そういう対象をSMの女王様のように言われては、普段は温厚で理知的な猛でも腹が立つのだ。

「精通の切っ掛けになった淫夢の対象なんだから、猛だっていやらしい目を向けていたんだろ？」

そんなに怒ることはないんじゃないか？」

泰輔に指摘され、猛は言葉に詰まった。

確かに、淫夢の対象にしていた時点で、猛はあの教育実習生に欲情していたのは事実だ。  
だから、泰輔の言葉に過剰に反応するのは偽善であるのだ。

「……言い過ぎたよ、悪かった」

泰輔の言葉に道理があることから、猛は泰輔に軽く頭を下げた。

「いやいや、チンポ以外で猛が感情を乱すのは珍しいし、いいものを見せてもらったよ。

それはそれとして、どんな淫夢だったんだ？

■C時代の猛の淫夢、興味あるわ」

ぐいぐいと突っ込んでくる泰輔に、猛は心の中で溜息をついた。

とはいえ、エロ動画の主演になることを了承したのは猛自身なので、ここで腹を立てたり、黙秘をするのは男らしくないことだ。

「……あのな、■Cの性知識での淫夢だから、笑わないでくれよ」

大学生となり、男と女のセックスについての知識が耳に入るようになった猛にしてみれば、当時の淫夢は無知の産物で恥ずかしいものなので、泰輔たちに断りを入れた。

「そりゃまあ、■Cの性知識、しかも、アナルセックスにがつつくようになる前の猛の性知識だから、ぼんやりしているのは分かってるって。

大丈夫大丈夫」

笑顔の泰輔に肩を叩かれたが、猛は泰輔の性格をよく知っている。

多分、笑うだろう、と予測している。

だから、猛は恥を忍んで当時の淫夢を説明することにした。

「場所は保健室で、窓にはカーテンがかかっている。

教育実習生さんが喘ぎながらブラウスの上から胸を揉んでいるんだ。

俺は全裸でチンポが勃起していて、こう、腹の底から押し出される感じでいったと思ったら、ブリーフにザーメンをぶっ放してたんだ」

自分で話していて、あまりにも拙い淫夢だと猛は思う。

保険の授業で、男と女の身体の仕組みについては学んでいたものの、セックスの具体的な方法を知らなかった猛にとって、あの凛々しい教育実習生が胸を揉みながら喘いでいるというのが妄想の限界だったのだ。

「ふうん」

泰輔がにやにや笑っている。

「■C時代の猛は、チンポはおマ○コに突っ込むものだって認識がなかったのかー」

揶揄するような泰輔の言葉に、猛は耳まで赤くなる。

「仕方ないだろ。

当時の俺は、いや、今もそうだけど、女性のアソコの実物を見たことがないんだ。

妄想の素材がないんだからな」

「それにしても、淫夢なのに手コキもフェラチオも出てこないあたり、当時の猛の初々しさがよく分かるよなあ」

満面の笑みを浮かべる泰輔の言葉に、猛は恥ずかしくなる。

「そういえば、ブリーフって言ってたけどさ、■C時代の猛は白ブリーフだったのか？」

猛の羞恥心などお構いなしという様子で、泰輔が問いを重ねてくる。

「ああ、親が買ってきた白ブリーフだったよ。

ボクサーパンツを穿くようになったのはDKの時だよ。

寮生活で親元から離れるから、下着が色気づいたとか言われなくなるだろ？

だから、自分の好きな下着を買うことにしたんだ」

猛の言葉に、泰輔が深々と頷いた。

「確かになー、今だったら親に下着のことを言われても気にならないけどさ、あの頃はうん、親の目を気にするよな、分かる分かる。

そういうところは猛も普通の男の子だったんだな」

泰輔が満足そうに呟いている。

「ということはさ、■C時代の猛は白ブリーフもっこりだったのか。

ていうかさ、■C時代なら同級生の半分ぐらいが白ブリーフだろ？

もっこり格差で同級生たちのチンポプライドをへし折ったのかー」

「チンポプライド」などという頓珍漢な言葉を口にする泰輔に、猛は少し呆れる。

「泰輔、まさかとは思うが、お前さ、俺が■C時代からデカチンだったって思っていないか？」

「違うのか？」

猛が確認をすると、泰輔が真顔で問い返してきた。

「あのなあ、保険の授業でやっただろうが、二次性徴を迎えてからチンポが大きくなるんだよ。

だから、二次性徴が来るのが■C二年だった当時の俺のチンポは、普通のチンポだよ」

猛が説明をすると、泰輔が真顔で首を振った。

撮影用カメラを構えている拓斗も小さく首を振っている。

「普通のチンポって、普通のデカチンってことか？」

「そんなわけないだろ……

精通した時はチンポの皮も被ってたし、チン毛も生えてなかったんだ。

本当に、ごく普通のチンポだったんだよ」

「えー、信じられないなあ」

泰輔がわざとらしく首を振る。

「そこまで言うんだったら、■C時代のチンポ写真出してくれよ」

泰輔の要求に猛は軽い頭痛を感じた。

「あのなあ、■C時代の俺は、ごく普通の■Cだったんだ。

チンポの成長記録を取るような趣味があるわけないだろうが」

「……そりゃそうか。

でも残念だなあ。

ずる剥けデカチンの猛の皮被りチンポ時代の写真だなんて、あったら皆欲しがっただろうにな」

「……そういうものか？」

猛は、残念そうに呟く泰輔のことが理解できない。

「じゃあ、話を元に戻すか。

精通した後は教育実習生の淫夢をオカズにしてオナニーをしていたのか？」

「いや」

猛は首を振った。

「あの頃は、保険の授業で知識はあったが、オナニーの仕方とか頻度については教科書には載ってなかっただろ？」

「ああ、そうだよな。

オナニーの仕方なんて、教科書には載ってなかったな」

猛の言葉に、泰輔が頷く。

「だから、精通はしてもオナニーをするって発想が当時の俺にはなくてさ、先輩にオナニーの手ほどきをされるまでは、不定期に夢精をするだけだったんだよ」

猛が■C時代のオナニー事情について説明をすると、泰輔が目を見開いた。

「じゃあさ、もしも先輩に手ほどきされなかったら、オナニーの習慣がつかなかったかもしれないのか？」

「……■C時代の俺は、性的なことに後ろめたさを感じていたから、手ほどきをされなかったらオナニーの習慣がつくのはもっと遅かっただろうな」

泰輔の問いかけに、猛は■C当時の自身の気持ちを思い出しながら回答した。

性的快楽に耽るようになった今だからこそ、気軽に話せるが、■C時代の猛にとっては人生の一大事だったのだ。

「じゃあ手ほどきをされた後は、オナニーをどのぐらいの頻度でしていたんだ？」

泰輔の次の問いかけに、猛は首を傾げた。

■C時代の記憶を思い返そうとするのだが、猛の性的な記憶というのは、ケツマ○コ奴隷としての自覚を得たDK時代以降が圧倒的に濃いので、どうしてもそれ以前の性的な記憶は印象が薄いのだ。

淫夢の記憶が今でも鮮明なのは、精通の切っ掛けであることと、猛にとって生まれて初めて女性を性的な目で見ただけでもあるので、記念碑のようなものだからだ。

それに比べると、日々のオナニーはぼんやりとしているのだ。

■C時代、いや、ケツマ○コの快楽に目覚める前までの猛にとって、あの淫夢は大切なオカズだったのだが、ケツマ○コの快楽に比べるとどうしても薄くなってしまふのだ。

「オナニーの頻度はあまり覚えてないんだよな。

いや、してたけど、回数まで気にしていなかったし、ケツマ○コの快楽に比べるとチンポを抜くのがって薄いからさ。

印象に残ってないんだよな」

質問に正確に答えられないことへの後ろめたさを感じながら、猛は回答した。

「まあ、俺たちはアナルセックスが大好きな猛を知っているからなあ。

そうかそうかー、ケツマ○コの快楽に比べるとチンポを抜くオナニーの快楽は薄いのかー。

猛ってば、本当にケツマ○コにチンポをぶち込まれるのが好きだよなあ」

泰輔が一瞬だけ、ケツマ○コを貪る雄の眼差しを見せる。

そのぎらついた眼差しに、猛のケツマ○コがキュンと疼く。

今日の撮影のために、猛と泰輔は二週間の禁欲を強いられた。

だから、普段なら気にならない些細な仕草でも猛はアナルセックスを連想してしまうのだ。

「じゃあ、オナニーの話題が出たところで、猛にはオナニーをしてもらおうか。

ほら、俺たちは猛とアナルセックスをしているから、猛のオナニーってレアなんだよな。思えば、お前がケツマ○コ奴隷だって発覚した切っ掛けも、猛のアナニーだったしな」泰輔の言葉に、猛は当時のことを思い出した。

あの頃の猛は、この寮の皆が、いや、丈翼大学の男子学生が猛のケツマ○コにチンポをぶち込みたいと劣情を抱いていることも知らず、チンポの代わりに猛ディルドでケツマ○コの疼きを慰めていたのだ。

その様子を泰輔たちに見られた結果が、今の丈翼大学でのアナルセックス体制なのでアナニーを見られたこと自体に後悔はない。

ただ、皆が猛のケツマ○コにチンポをぶち込みたいと劣情を抱いていたのなら、もっと早くにチンポが欲しいと告白するべきだった。

それが、猛の後悔なのだ。

「ええと、オナニーの前に、猛の身体をきちんと撮影しないとな。

まずは立ち上がってくれるか」

「分かった」

泰輔の指示に従い、猛は椅子から立ち上がった。

剣道で鍛え上げられた肉体はがっしりとしており、男の闘争本能に最適化されたかのような迫力のある筋肉が撮影用カメラに収められる。

通常、下着のもっこりは正面から見るとあまり目立たない。

だが、ペットボトル早漏チンポを収める猛の真っ赤なボクサーパンツのもっこりは正面からでもその溢れんばかりの存在感が伝わってくる。

「続いて、横を向いてくれるか？」

「分かった」

泰輔の指示に従い、猛は撮影用カメラに対して横を向いた。

撮影用カメラが猛の腰回りにズームする。

真っ赤なボクサーパンツのもっこりは側面から見るとがっしりとした太もも越しにぼこっと盛り上がっている。

中身は見えないが、デカチンだということがよく分かるもっこりだ。

真っ赤なボクサーパンツに覆われた猛のケツのラインも雄肉が詰まっていることがよく分かるがっしりとした曲線だ。

猛のケツマ○コを知らないものならば、この男らしい雄肉の間にチンポを抱きしめることを切望している淫乱ケツマ○コが鎮座しているなど妄想すらないだろう。

「んじゃさ、猛、ちょっと腰を前後に振ってくれるか」

「ああ」

泰輔の指示に従い、猛は腰を前後に振る。

その動きに合わせて、猛の真っ赤なボクサーパンツのもっこりがばるんばるんと弾む。

真っ赤なボクサーパンツに収められたペットボトル早漏チンポの揺れに合わせてボクサーパンツの布地が押し出されているのだ。

デカチンでなければあり得ないもっこりが弾む様子が撮影用カメラによって記録される。

「じゃあ、次は背中を向けてくれるか？」

「分かった」

泰輔の指示に従い、猛は撮影用カメラに対して背中を向ける。

猛の背中もまた、筋肉がみっしりとした男の凄みを感じさせるものだ。

背中で語る者が男だと言うのなら、猛は男の条件を十二分に満たしていると言える。

そして、真っ赤なボクサーパンツに覆われた猛のケツは正面から見ても頑強な尾根のようであった。

エクボがくっきりと浮かび上がるケツは雄々しさに満ちており、この分厚いケツ肉の間にチンポを求めて善がり狂うケツマ○コがあるなどとは、とてもではないが思えないだろう。

「よーし、それじゃあ猛、ボクサーパンツを脱いで全裸になろうか」

「ああ」

泰輔の指示に従い、猛は真っ赤なボクサーパンツに手をかける。

その手が一瞬、逡巡に震える。

猛はエロ動画の主演になることを了承している。

だが、それでもエロ動画の主演になることは生まれて初めてのことなのだ。

これから、全裸になり、ペットボトル早漏チンポを晒し、恥ずかしいことを色々するのだと思うと、羞恥に震えてしまうのだ。

とはいえ、ここでためらうことは男らしくないことだ。

猛はもう一度覚悟を決めると、真っ赤なボクサーパンツを一気に引き下ろした。

猛は色白の肌をしており、日に焼けにくい体質をしている。

だから、ケツとその他の部位とで肌の白さに大きな違いはない。

だからこそ、和の人間であるにもかかわらず、その色白の肌と筋肉質な身体とで西洋彫刻のような魅力を放てるのだ。

真っ赤なボクサーパンツを足から引き抜いた猛は、畳んで机の上に置いた。

「それじゃあ、足を肩幅に広げてくれ」

「ああ」

泰輔の指示に従い、猛は両足を肩幅に開いた。

猛の太ももの間に堂々とぶら下がる玉袋が見える。

常人より金玉が大きく、鶏卵Sサイズの金玉とも称される猛の玉袋が猛の太ももの間で堂々とその存在を主張している。

それに加えて、玉袋の奥に猛のずる剥け亀頭の裏側や陰茎の一部が見える。

猛のペットボトル早漏チンポは平常時が 11.6cm なので大きな玉袋越しにずる剥け亀頭が見えるほどのデカチンなのだ。

「いやいや、股の間に玉袋と亀頭が見えるのはデカチンの証。

見た目だけなら、チンポの王様だよなあ」

泰輔が太ももの間から覗く猛の玉袋と陰茎について称賛する。

泰輔の称賛を聞いて、猛はいたたまれなくなる。

確かに、猛のペットボトル早漏チンポはデカチンだ。

だが、このデカチンは酷い早漏なのでチンポを使ったセックスの役にはまったく立たないのだ。

そのことを思い知らされている猛にとって、ペットボトル早漏チンポへの称賛はいたた

まれないものでしかないのだ。

撮影用カメラも猛の股の間を記録する。

「猛、腰に手を当ててゆっくりと腰を左右に振ってくれるか？」

「分かった」

泰輔の指示に従い、猛は腰に手を当ててゆっくりと左右に腰を振る。

その動きに合わせて、太ももの間にぶら下がっている玉袋と陰茎がぶるんぶるんと揺れる。

平凡チンポではありえない大胆な動きだ。

撮影用カメラは、デカチンゆえに揺れる猛の陰茎と玉袋も記録していく。

「もういいぞ、それじゃあそのまま正面を向いてくれ」

「ああ」

泰輔の指示に従い、猛は正面を向いた。

元々、猛は体毛が薄い。

体毛の量も少なければ、細い毛質なので手入れをしなくても体毛がほとんど目立たないのだ。

それ故に、猛の肌の白さが目立ち、生きている男であるにもかかわらず西洋彫刻のような魅力を放っているのだ。

だが、そんな猛であっても、下腹部の白さと艶やかさは手を加えた結果だ。

猛の下腹部には、成人男性ならば備わっているはずのチン毛が生えていない。

天然パイパンではない。

猛は毎日の入浴でチン毛とアナル周りの毛を剃っているのだ。

アナル周りの毛を剃るのは、チンポをケツマ〇コに突っ込んでくれる男たちが不快な思いをしないようにという気遣いである。

一方、チン毛を剃るのは、DK時代、そして、現在も、猛のケツマ〇コにチンポをぶち込んでくれる男たちが、チン毛がない方が猛らしいと褒めてくれるからだ。

成熟した男性であるにもかかわらず、チン毛がない猛は雄としては欠落を抱えている。

だが、ミロのヴィーナス像が欠落した腕ゆえに不思議な魅力を放つように、猛の裸体はチン毛がないことで、アンバランスゆえの危うさという魅力を放っているのだ。

そして、猛のペットボトル早漏チンポは、西洋彫刻のような裸体に真っ向から対立するデカチンであった。

ペットボトル早漏チンポの根元には、この二週間の間、猛の射精を禁じてきた射精防止リングが嵌められている。

猛の陰茎は常人より太く長く、ずる剥け亀頭は綺麗なピンク色をしている。

そして、亀頭は雁高で天然の露茎ゆえの包皮が留まっているにも関わらず、性の矢印とも呼べるほど、亀頭が大きいのだ。

背面から見た時から明らかなであった玉袋は正面から見るとその存在がくっきりとしている。

常人より大きな金玉を備えた玉袋は堂々としており、平常時 11.6cm の陰茎とも釣り合いが取れているのだ。

そして、これが猛のペットボトル早漏チンポの最大の特徴なのだが、排泄器官であり、性



器であるにもかかわらず、猥雑さや雄臭さを感じさせないイケメンチンポなのだ。

猛のペットボトル早漏チンポは、見事なデカチンであるにもかかわらず、汚さやいやらしさとは無縁で、その顔や身体と同じく、清潔感溢れるイケメンぶりなのだ。

ただ、デカチンというだけならば、猛と同等のデカチンやもっと大きなデカチンもいるだろう。

だが、清潔感溢れるイケメンチンポは世界中を探しても、猛だけしか備えていないと断言しても過言ではないほどに、猛のペットボトル早漏チンポは卑猥さと無縁なのだ。

「ほんとさー、猛のペットボトル早漏チンポってずるいぐらいイケメンだよなあ。

顔も身体もイケメンなのに、デカチンまでイケメンだなんて羨ましいぜ」

泰輔が猛のペットボトル早漏チンポを見つめながら感嘆する。

この剣道部ではずる剥けチンポは猛と泰輔の二名だけだ。

それ故に、他の剣道部員たちは泰輔が何か失言するたびに、「ずる剥けなのに卑猥な短小チンポ」だの、「汚くて見苦しくて、おまけに小さいんじゃないよなあ」などと猛のペットボトル早漏チンポと比較して泰輔のチンポを揶揄するのだ。

泰輔の名誉のために述べておくと、泰輔のチンポは一般的なチンポに比べれば十分に大きい方だ。

ただ、猛のペットボトル早漏チンポがデカチンすぎるだけなのだ。

「こんなにイケメンチンポのデカチンなのに、雄セックスの役に立たない早漏なんだからなあ、天は二物を与えずってことかな」

泰輔の言葉に、猛は恥ずかしくなる。

ケツマ〇コ奴隷であることを受け入れている猛だが、それでも男としての猛は己のチンポが雄セックスの役に立たない早漏チンポだということが恥ずかしいのだ。

「それじゃあ、猛のチンポの計測をするぞ」

「え？ 今更じゃないか？」

泰輔の言葉に猛は驚いた。

チンポの計測自体に驚いたわけではない。

DK時代から、猛はチンポを計測されてきた。

だから、チンポ計測自体に問題があるのではない。

猛がケツマ〇コで交流してきた丈翼大学の男子学生たちにとって、猛のペットボトル早漏チンポのサイズは周知の事実なので、今更計測する必要性を感じなかったのだ。

「そりゃまあ、俺たちは猛のペットボトル早漏チンポのサイズを覚えているけどさ、記憶って薄れるんだよな。

だから、猛に関することはできる限り記録として残しておきたいんだよ」

「なるほど」

泰輔の説明に猛は納得した。

このエロ動画の趣旨は、高坂猛というケツマ〇コ奴隷がこの丈翼大学に在学していたことを記念するものだ。

だったら、泰輔の言う通り、ペットボトル早漏チンポのサイズを計測することは必要なことだろう。

泰輔が巻き尺を取り出し、猛の陰茎の根元に先端を当てた。

そして、ゆっくりと巻き尺を引き延ばしていく。

撮影用カメラが猛の亀頭の先端とそこに合わせられた巻き尺の数字を記録する。

11.6cm。

それが、猛のペットボトル早漏チンポの平常時の長さなのだ。

「んじゃさ、ペットボトル早漏チンポを勃起させてくれるか？」

「ああ」

泰輔に指示に頷き、猛は陰茎を握り扱き始めた。

猛の手の中で陰茎が充血し、太く長く逞しくなっていく。

だらんと垂れていた陰茎が上反りになり、亀頭が天を貫くように上を向く。

「勃起させたぞ」

猛はフル勃起ペットボトル早漏チンポから手を離れた。

デカチンであるにも関わらず、猛のペットボトル早漏チンポは自重でたわむことなく、堂々と上を向いている。

勃起角度も一流なのだ。

そして、平常時では清潔感溢れるイケメンチンポではあったが、勃起をしたペットボトル早漏チンポは、男性器であることを如実に示している。

フル勃起することで、男性器としての本領を露わにしたのだ。

「それじゃあ、猛のフル勃起ペットボトル早漏チンポを計測するぞ」

泰輔が猛の陰茎と玉袋の境目に巻き尺の先端を当てた。

そして、上反りの陰茎に這わせるように巻き尺を伸ばしていく。

撮影用カメラが猛の亀頭と巻き尺の数字を記録する。

23.7cm。

それが、猛のフル勃起ペットボトル早漏チンポの長さなのだ。

「しかしまあ、デカチンなのにギッチギチに上を向いているよなあ」

泰輔が猛のフル勃起ペットボトル早漏チンポを握り、ぐいっと下に向け、手を放した。

フル勃起ペットボトル早漏チンポが勢いよく跳ね上がり、猛の腹筋にぶつかる。

「こんなにガッチガチで元気で、その上でっかいチンポが早漏世界選手権優勝だなんて、信じられないよなあ」

「……頼むから、早漏早漏って何度も言わないでくれ」

泰輔の言葉に猛は顔を真っ赤にする。

ケツマ○コ奴隷としての猛にとって、ペットボトル早漏チンポの性能は些事だ。

だが、男としての猛にとって、ペットボトル早漏チンポの性能は重大事案なのだ。

だから、早漏早漏と連呼されると猛はいたたまれなくなるのだ。

「でもさ、早漏なんだよな、雄セックスの役に立たない早漏チンポ」

だが、泰輔が追撃を加えてくる。

猛のペットボトル早漏チンポが雄セックスの役に立たないのは事実なのだ。

だが、その事実を何度も指摘されるのは男としての猛にとって、屈辱なのだ。

「んじゃ、猛の射精防止リングを外すか」

泰輔が射精防止リングの電子錠を取り出し、猛の射精防止リングに当てた。

小さく音が鳴り、猛の射精防止リングの一部が引っ込み、隙間ができる。

泰輔はその隙間から猛のフル勃起ペットボトル早漏チンポを抜き、射精防止リングを外す。

「それじゃあ、二週間の禁欲で溜まった性欲を発散するついでに、猛の早漏ぶりをカメラに収めような」

泰輔が射精防止リングを指で弄びながらにやにやと笑う。

猛の早漏の酷さを動画として残されることは、男としての猛にとっては屈辱の極みだ。

だが、ケツマ○コ奴隷としての猛にとっては、猛のケツマ○コを使ってくれた男たちが悦ぶのならば問題ないと感じている。

猛の理性は、エロ動画の主演になることを了承した己の言動に責任を持つべきだと判断する。

だから、猛は久しぶりにオナニーをすることを決意する。

だが、一つ疑問が浮かんだ。

「あのさ、早漏を披露するのって、チンポを扱けばいいのか？」

猛の質問に、泰輔が真顔で首を傾げた。

撮影役に徹している拓斗が口を挟まないで、部屋に沈黙が広がる。

しばらくして、泰輔が口を開いた。

「アナニーしたいってことか？」

猛のケツマ○コについては、あとで取り上げるから、アナニーは駄目だぞ」

「あ、いや、そうじゃない」

猛がケツマ○コでイきたいのだと誤解をしている泰輔に、猛は首を振った。

「その、チクニーとオナニー、どっちをすればいいのかってことなんだ」

猛が詳しく問いを述べると、泰輔が真顔で拓斗の方を向いた。

拓斗は猛をじっと見ている。

猛は泰輔を見つめる。

「……猛って、チクニーするの？」

泰輔が真顔で猛に問いかける。

「あ、ああ。

DK時代に、乳首を開発されてチクニーできるようにされたんだよ」

「初耳なんだけど！」

猛の告白に、泰輔が大声を上げた。

「いやさ、だってさ、猛って猛ディルドでアナニーに耽っていたわけじゃん。

チンポが好きなのに、男を誘う勇気がなかったから。

だからさ、俺たちは、猛はケツマ○コ奴隷で、チンポ渴望淫乱だと思ってたわけだけど、チクニーできるの？」

チクニーが日課なの？」

猛がチクニーをできるということがよほど衝撃的だったのか、泰輔が早口で捲し立てる。

「いや、チクニーは日課にしていない」

泰輔の捲し立てに猛は首を振って否定する。

「乳首を開発されたのは、俺がケツマ○コ奴隷としての本性を受け入れたDK三年の時だから、性欲は寮生たちとのアナルセックスで発散させていたんだ。

大学に入ってから、俺の本性が露見するまでの二年間はケツマ○コの疼きを鎮めるためにアナニーしかしていないし、だから、正直に言って、チクニーはできるけど、アナニーに比べたら優先順位は低いんだよな」

猛がチクニーの事情について説明をすると、泰輔が大袈裟に首を振った。

「いや、前々から疑問に思ってたんだけどさ、お前のDK時代、凄くね？

ケツマ○コだけじゃなくて、乳首まで開発されたのかよ。

いやまあ、猛がケツマ○コを開発された経緯はあとでがつつり取り上げる予定だったけどさ、うん」

動揺しているのか、泰輔が大袈裟に頷きながら喋っている。

「で、チンポを抜くのと、チクニーをするのと、どっちにすればいいんだ？」

猛がもう一度問いかけると、泰輔が苦笑いを浮かべながら口を開いた。

「そうだなー。

予定外だけど、チクニーにするか。

この大学で猛のケツマ○コの世話になった連中が驚くだろうしな」

「分かった」

泰輔の言葉に頷くと、猛は両手で己の乳首を摘まんだ。

開発されたとはいえ、アナルセックスかアナニーメインの性活を送ってきた猛にとって、チクニーは数えるほどしかしたことがない自慰だ。

DK時代も開発こそされたものの、当時の寮生たちは猛のケツマ○コが一番のお気に入りだったので、チクニーを披露する機会はあまりなかったのだ。

とはいえ、一度開発された身体がその快感を忘れることはない。

色白の胸板にひっそりと咲く桜色の乳首を摘まみ、引っ張ったりしているとケツを弄ばれながら乳首を開発された思い出が蘇る。

二週間の禁欲で劣情が煮え滾っている下腹部がキュンキュンと疼き、猛の鈴口から我慢汁がぬとぬと流れ出る。

猛のペットボトル早漏チンポは濡れやすい。

我慢汁の量が多いのでフル勃起ペットボトル早漏チンポがぬらぬらとして淫猥さを増していくのだ。

「ん……んんっ」

猛は乳首を捏ねながら、卑猥な喘ぎ声を漏らす。

猛のフル勃起ペットボトル早漏チンポがぐいっぐいっとな揺れながらその威容を見せつける。

下腹部から煮え滾り尿道へと駆け上がっていく切なさに猛は内股になって腰を前後に振り始める。

性欲など感じさせない猛のイケメンフェイスが徐々に淫らさと浅ましさに塗り替えられていく。

「うおおおっ」

猛は腰を前後に振りながら右手を乳首からずる剥けピンク亀頭を包むように移動させ、天を仰いでいるフル勃起ペットボトル早漏チンポを斜め前方に傾ける。

そして、左手で乳首を強く捻りながら引っ張った。



ああ、でも悪臭じゃないぞ。

雄臭いんだけど、こう、下腹部にクる感じがしてなあ」

猛のザーメンの雄臭さを評論している泰輔が、ギラリと目を光らせる。

泰輔のジャージにもっこりが浮かび上がる。

猛のザーメンの雄臭さに触発されて猛のケツマ○コにチンポをぶち込みたくなったのだろう。

泰輔が解説した通り、猛のザーメンは物凄く雄臭い。

猛にしてみれば、ザーメンの臭いとして猛をチンポで屈服させる男たちのザーメンと変わりはないと思うのだが、猛にチンポをぶち込みたいと思っている男たちにとっては、チンポをギンギンにさせ、猛のケツマ○コへの欲望を燃え上がらせる媚薬のような効果を持っているようなのだ。

「なあ、猛。

お前も俺のチンポでケツマ○コを蹂躪されたいだろ？」

泰輔が猛の雄ケツをわしづかみにしながら浅ましく誘惑する。

「駄目だぞ、泰輔。

お前のチンポの出番は一番最後だぞ。

お前のチンポの射精防止リングの電子錠を持っているのが俺だってこと、覚えているよな」

これまでカメラマンに徹してきた拓斗が、泰輔を叱責する。

だが、拓斗のズボンにも勃起チンポによるもっこりが浮かび上がっている。

泰輔が頭を掻きむしってから大きく息を吐いた。

「……ああ、悪い。

猛のザーメンの臭いでクラッとしちまったよ」

泰輔が首を振り、猛の雄ケツから手を放した。

「んじゃ、仕切り直しだ。

お前が俺たちの前でケツマ○コ奴隷の本性を露わにしたときみたいに、お前のザーメンを飲んでくれるか？」

泰輔の言葉に、猛は泰輔たちに己の本性、ケツマ○コ奴隷の淫乱さを受け入れてもらったときのことを思い出した。

あのときも、猛は命じられるがままに、己のザーメンを飲んだのだ。

ザーメンを飲むことは、男としての猛にとって、屈辱そのものだ。

それも、普通の男に比べて臭いが濃く、量も多い己のザーメンだとその精神的苦痛は計り知れない。

けれど、ケツマ○コ奴隷としての猛にとって、ザーメンを飲むということは恥辱であると同時に悦楽をもたらす行為だ。

猛はザーメンの臭いと味に、猛り狂うチンポを連想する。

そして、猛り狂うチンポからアナルセックスの悦楽を思い出し、ケツマ○コが疼くのだ。

猛は右手に受け止めたザーメンを見る。

猛の射精量は、普通の男の二倍か、それを上回るほどの量を誇っている。

雄臭さが濃いことは既に述べたが、猛のザーメンはねっとりとしていて、その白濁色も普

顔も身体も平常時のチンポまでもが爽やか系イケメンである猛の野性味がザーメンに凝縮されているのだろう。

「でさ、折角だから、猛にはどういう理由でザーメンを飲むとザーメンをぶっ放すのか、教えてくれるか？」

泰輔の問いかけに猛は羞恥心で身震いをする。

だが、その身震いは生娘が生まれて初めて勃起チンポを見たときの反応のようなものであり、雄の征服欲を刺激するものでしかなかった。

「……ザーメンの臭いと味を感じると、勃起チンポを連想するんだ。

勃起チンポを連想すると、アナルセックスを思い出してケツマ○コが疼くんだ。

毎日のアナルセックスで性欲を適度に解消していると、それだけで終わるんだが、禁欲した後だとケツマ○コに勃起チンポをぶち込まれている気がしてきて、それでザーメンが暴発するんだ」

猛は、羞恥心と男としての屈辱に震えながら先ほどの射精の理由を説明した。

「猛は、ザーメンの臭いと味で勃起チンポを連想するのか。

淫乱だなあ。

そんなに淫乱な身体じゃあ、二週間の禁欲は地獄だったろ？」

泰輔の問いかけに猛は大きく頷いた。

「ああ、一週間前ぐらい前から毎晩アナルセックスの夢を見るぐらいだった。

俺には、毎日ケツマ○コを舐けてもらう必要があるって改めて思い知らされたよ」

猛の告白を聞いた泰輔が口笛を鳴らした。

「猛のケツマ○コは特別製だからなあ。

俺たち全員で可愛がってやらないと満たされないんだろうな」

そう言いながら、泰輔が猛にウェットティッシュを差し出した。

「それじゃあ、ザーメンを拭ってくれるか？」

猛としてはまだまだザーメンを飲みたいだろうけど、今回はまだまだやる必要があるからな。

ザーメン飲みで金玉を空っぽにするわけにはいかないんだ」

「分かった」

猛は頷き、ウェットティッシュで手を拭い、続いてフル勃起ペットボトル早漏チンポに絡んでいるザーメンを拭き始める。

「……今思ったんだけどさ」

「なんだよ」

泰輔に声をかけられ、猛はザーメンを拭いながら問いかける。

「ザーメンを飲むと射精するぐらい気持ちよくなるように開発されたのって、やっぱりDKのときか？」

泰輔の問いかけに、猛はザーメンを拭いながら首を振った。

「いや、DKのときはそんなことはなかったな。

ケツマ○コ奴隷として目覚めた後はほぼ毎日チンポをぶち込んでもらったこともあって、欲求不満になることがなかったからさ。

だから、ザーメンを飲んで射精したのは、あのときが最初だな。

あの頃はアナルセックスがしくて仕方がなかったのに、俺が臆病だったせいで、チンポをぶち込んでくれって言うことができなくて、ムラムラして仕方がなかったからな」

猛の返答に、泰輔が嬉しそうに笑った。

「そうかそうか、DK時代の開発の結果じゃないのか。



そうかそうかー」

猛はどうして泰輔がDK時代に拘るのが分からなかったのか、とりあえずザーメンを拭うことに専念した。

## 奥付

『淫穴主将猛の卒業記念エロ動画制作』より、CHAPTER1

初出：2023年8月19日

著者：金目

金目の同人活動一覧

【pixiv】

<https://www.pixiv.net/member.php?id=22137005>

【DLsite がるまに】

[https://www.dlsite.com/bl/circle/profile/=maker\\_id/RG01002299.html](https://www.dlsite.com/bl/circle/profile/=maker_id/RG01002299.html)

【ゲイ小説進捗状況呟きアカウント】

[https://twitter.com/chigaya\\_deep](https://twitter.com/chigaya_deep)